

1989

Kyoto Seika 京都精華大学 University

美術学部

- Faculty of Art
Department of Fine Arts
- Oil Painting
 - Japanese Painting
 - Sculpture
 - Printmaking
 - Ceramics
- Department of Design
- Visual Communication Design
 - Urban Living Design
 - Textile Design
 - Cartoon

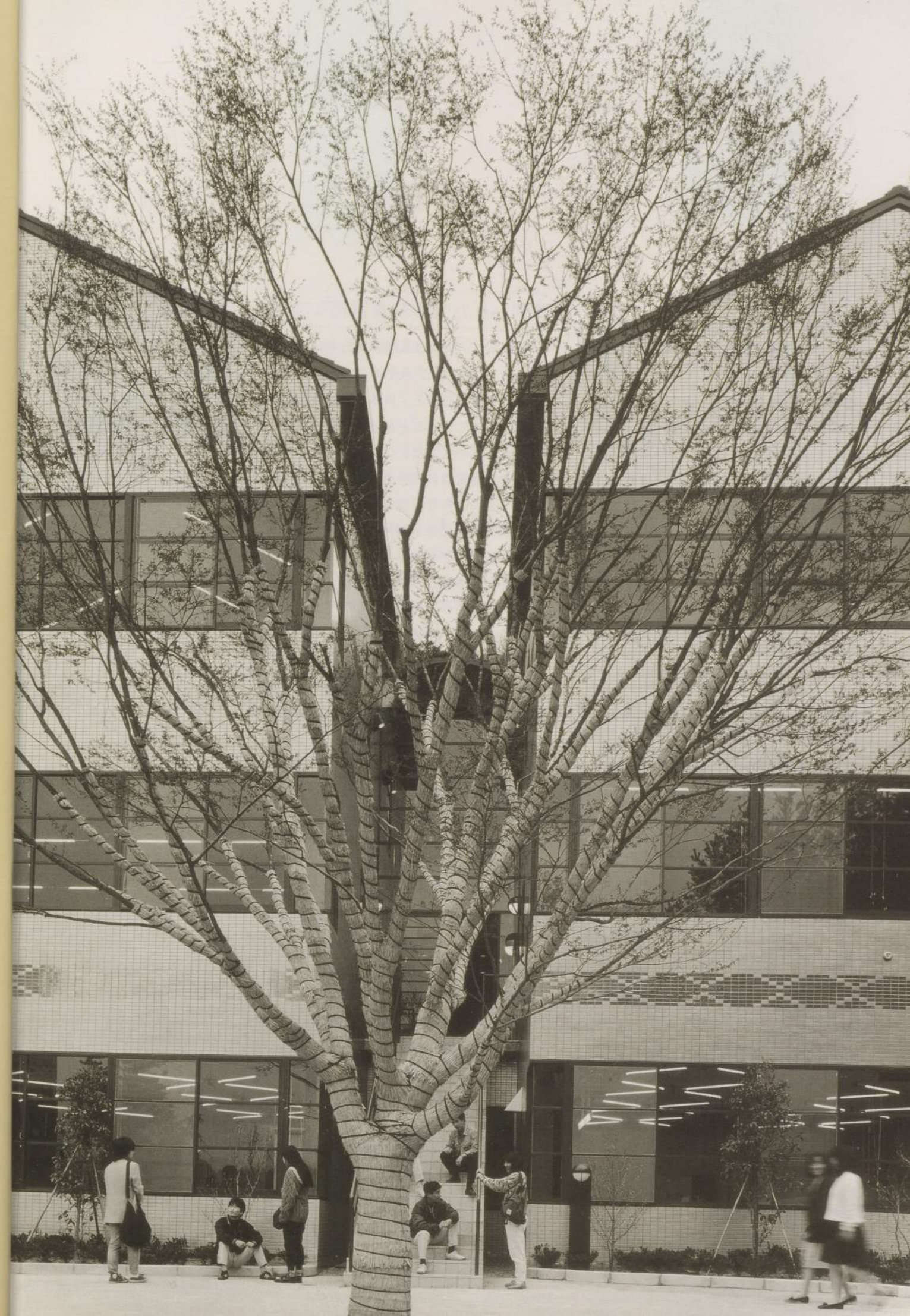
短期大学部

Junior College
Department of English

CONTENTS

キャンパス図	
沿革	
“開かれた大学”を目指して	2
〈自由自治〉を求めて	3
美術学部	5
造形学科 洋画	7
日本画	9
立体造形	11
版画	13
陶芸	15
デザイン学科 ビジュアルコミュニケーションデザイン	17
アーバンリビングデザイン	19
テキスタイルデザイン	21
マンガ	23
学外実習	25
VOICE	26
美術学部 教員組織	28
短期大学部 英語英文科	29
20年の歩み	30
英語英文科の現状	32
海外研修とセミナー	39
VOICE	41
英語英文科 教員組織	44
図書館	47
アンティオーク大学	48
アセンブリーアワー	49
クラブ活動と行事	50
セミナーハウス	52
寮と下宿	53
奨学金	54
就職	56
美術学部 学生作品	57
交通案内図	

キャンパス図



- 1968(昭43) 京都精華短期大学(共学)を開学
英語英文科(英米文学コース・秘書
コース・貿易英語コース・ガイドコ
ース)
美術科(絵画コース・デザイン
コース)
「アセンブリー・アワー」始まる
「The Kyoto Seika English Papers」発
刊
 - 1970(昭44) 美術科に染織コース増設
「木野通信」刊行始まる
 - 1970(昭45) 「木野評論」(年1回刊)発刊
 - 1972(昭47) 英語英文科に国際文化コース増設
 - 1973(昭48) 美術科に立体造形コース、デザイン
コースにマンガクラス増設
第2外国語に朝鮮語開設
 - 1975(昭50) 伊谷記念朽木学舎オープン
「The Kyoto English Papers」を「Kyoto
Review」に改称
 - 1979(昭54) 京都精華大学美術学部開設
造形学科(洋画・日本画・立体造形)
デザイン学科(デザイン・染織・マ
ンガ)
京都精華短期大学英語英文科は京都
精華大学短期大学部英語英文科に改
称
 - 1982(昭57) 京都精華短期大学美術科を廃止
 - 1985(昭60) 丹後学舎オープン
 - 1986(昭61) 美術学部造形学科に版画専攻と陶芸
専攻、同デザイン学科にアーバンリ
ビングデザイン専攻の増設を決定
- 造形学科

 - 洋画専攻
 - 日本画専攻
 - 立体造形専攻
 - 版画専攻
 - 陶芸専攻

デザイン学科

 - ビジュアルコミュニケーション
デザイン専攻
 - アーバンリビングデザイン専攻
 - テキスタイルデザイン専攻
 - マンガ専攻
- 短期大学部 英語英文科
 - 1987(昭62) 人文学部(昭和64年4月開設予定)
申請

“開かれた大学”を目指して

これからの大学は〈開かれた大学〉であるべきです。それは、大学の外の社会に対して開かれていることと、日本の外の世界に対しても開かれていることを意味します。

われわれの大学は、これまでも、そのような理念で運営されてきましたが、1987年度から、つぎのような方法で、いままでの学生層とは異なる人々にも門戸を開放しています。どうかふるって応募し、この大学に新風を吹きこんで下さるよう期待しています。

●社会人入試(美術学部)

これからの日本は高齢化社会に向っていきます。第二の人生を迎えようという、原則として40歳以上で意欲に燃えている人は、面接と適性によって、入学を許可します。

●帰国子女入試(美術学部)

海外に滞在して高等学校卒業程度の教育を受けたのち帰国した子女は、大学において、海外での経験や知識を生かしてほしいものです。本学はそのような帰国子女に対して、適性と日本語のテスト、および面接により、門を開きます。

●留学生入試(美術学部)

外国からの留学生は従来も受け入れてきましたが、積極的に歓迎します。本学において、所定の入学試験を受けられることと、日常会話程度の日本語が話せることが必要です。

以上、「社会人入試」「帰国子女入試」「留学生入試」それぞれ10名程度を受け入れる予定です。これら多様多彩な人々が入学することは一般の学生により影響を与えることにもなると思い、おおいに期待しています。

(詳細は募集要項をごらん下さい。)



〈自由自治〉を求めて

学長 笠原芳光

〈自由自治〉という理念を掲げて、私達の大学が出発してから20年になります。

〈自由自治〉は言葉としてはすばらしいけれど、実行するのはたいへんなことです。〈自由〉は日本でも中世においては、もっぱら我侭勝手、自分本位の意味に用いられましたが、今でも、その一面が含まれています。

近代になって初めて束縛からの解放や主体的であること、といった意味が強調されるようになりました。もともと〈自由〉には、正と負、よい意味と悪い意味の両面があるというべきでしょう。

この大学でも20年の間には困ったこともありました。いつだったか、夜警を担当してもらっている人と、そんな問題で話しあったことがあります。

「大学は〈自由自治〉を唱えていればよいのですが、われわれは夜遅くまで教室のなかで、つまらぬ遊びをして騒いでいる学生がいるのを、説得しなければなりません」

こんなことを聞かされましたが、大学の考えをよく理解し、学生にも愛情をもっている人だけに、頭の下がる思いがしたことです。

この大学はこまかい規則を作って、権力的に管理することをしていないのですが、それでももちろん基本的なルールは定まっています。それを良識をもって守りつつ、さらに〈自由〉とはなにか、〈自治〉はいかにあるべきかを追求することが、学生にとっても、教職員にとっても、大きな課題であると思います。

昔、親鸞が「善人なをもて往生をとぐ。いはんや悪人をや」という大胆な逆説を説いたことはよく知られています。善人よりも悪人のほうが救いを求めているから、というのですが、親鸞の心に反し、この言葉をよいことにして悪事を働く連中が、少なからず現れたのです。それでも、親鸞は、この教えは真理であるとして、撤回しませんでした。

それを思えば、私達も〈自由自治〉を唱えるために起こる多少の困難は覚悟しなければなりません。いや、それよりも〈自由自治〉の積極的な意味を、もっと実現していきたいものです。

〈自由自治〉がすぐれた言葉であるのは、それが決まりきった、定形の意味をもつものではないからです。それはさまざまに解釈される、不定形の、それこそ自由な理念であるからです。

制度や規則は、とくに社会的な生活に必要なものであるにもかかわらず、ともしれば人を拘束するものになりがちです。

これもさらに昔、ユダヤの律法主義のもとに生きたイエスは、人に休息をもたらすはずの安息日が、その日に労働する者を罰するという制度になってしまっているのに対して、「安息日は人間のためにある。人間が安息日のためにあるのではない」といいました。

私達は〈自由自治〉を真に人間を生かす理念とするため、さらに、その深い精神を求めていきたいものです。